救われる富者とは誰か

アレクサンドリアのクレメンス
藤遥　制作

1〜4章　富む人へのへつらいと、救いへの望み

1:1 富む人々に、ほめたたえる言葉を贈り物として差し出す人々がいます。わたしには、彼らはへつらう者、卑しい者と判断されて当然だと思われます。ありがたくもないものを、大きな見返りを求めて恵むふりをするからです。しかし、それだけではありません。彼らは神を敬わない者であり、人を陥れる者でもあります。1:2 神を敬わないというのは、こういうことです。ただひとり完全で善である神がおられます。万物は、この神からいで、神によって成り、神に帰するのです（ローマ一一・三六）。彼らはこの神をほめたたえ、あがめることをやめて、誉れを、生活の中を転げ回る人間に着せています[1]。要するに、神の裁きの下にあるもの[2]。1:3 人を陥れるというのは、こういうことです。有り余る財は、それだけでも、持つ人の魂をゆるませ、堕落させ、救いを得られる道からそらせるのに十分です。ところが彼らは、度を越えた賛辞の快さで富む人々を高ぶらせ、その心をさらに惑わせます。そして、富む人々がもてはやされるもとになっている富のほかは、いっさいのものを見下すように仕向けます。まさに、ことわざに言う火に火を注ぐことをしているのです。うぬぼれにうぬぼれを汲み足し、もともと重い富に、さらに重い荷として尊大さを積み上げています。この重荷こそ、危険で死をもたらす病として、むしろ削り取り、切り除くべきだったのです。高くされ、大きくされる者には、その裏返しとして、低い所への転落と失墜が付きまとっているからです。神の言葉が教えるとおりです。1:4 わたしには、こう思われます。富む人々の機嫌を取って害を与えるよりも、彼らの救いに手を貸すほうが、はるかに人を愛することです[3]。それも、できるかぎりのあらゆる方法で、です。一つには、神に願い求めることによってです。神は、ご自分の子供たちに、このようなものを確かに、また喜んで与えてくださいます。もう一つには、救い主の恵みによって、言葉で彼らの魂をいやし、照らして、真理を得るように導くことによってです。真理を得て、良いわざによって輝く人だけが、永遠のいのちの賞を勝ち取るのです。1:5 ただし、その祈りには、強く粘り強い魂が要ります。生涯の最後の日まで続く魂です。また、生き方には、善良でぶれない心の構えが要ります。救い主のすべての戒めに向かって身を伸ばしていく心の構えです。

2:1 救いは、財産のない人より、富む人にとってのほうが難しいと思われています。その理由は、おそらく一つではなく、さまざまです。2:2 実際、ある人々は、主の声をすぐに、軽々しく聞きました。富む人が天国にはいるよりは、らくだが針の穴を通り抜けるほうがもっとやさしい、という言葉です（マタイ一九・二四、マルコ一〇・二五、ルカ一八・二五）。そして、自分は生きられない者だと見て、自分に絶望しました。すべてを世に明け渡しました。そして、ここでのいのちだけが残されているかのようにそれにしがみつき、かの世への道からいっそう離れてしまったのです。主であり師であるかたが、どんな人を富む人と呼んでおられるのかを、もう調べようとはしませんでした。人にはできないことが、どのようにしてできるようになるのかも、調べませんでした。2:3 ほかの人々は、このことを正しく、ふさわしく悟りました。しかし、救いにつながるわざを軽んじて、望むものを得るために必要な備えをしませんでした。2:4 わたしがこの両方を言うのは、救い主の力と、明らかに現れた救いとを知った富む人々のことです。真理の手ほどきを受けていない人々のことは、わたしにはあまり関わりがありません。

3:1 そこで、真理を愛し、兄弟を愛する人々[4]は、召された富む人々に対して、横柄に高ぶってはなりません。反対に、自分の利益を求めて彼らにへつらってもなりません。まず、言葉によって、彼らから根拠のない絶望を取り除かなければなりません。そして、主の言葉をしかるべく説き明かして、彼らに示さなければなりません。戒めに聞き従うなら、天国を受け継ぐことは、彼らからまったく断たれてはいないのだ、と。3:2 次に、彼らは、恐れなくてよいものを恐れていたこと、望むなら救い主が喜んで受け入れてくださることを知るでしょう。そのと

きには、前もって示し、奥義に導き入れなければなりません。どのように、またどんなわざと心の構えによって、望みにあずかれるのかを、です。望みは、彼らにとって手の届かないものではなく、反対に、何もせずに手に入るものでもないからです。3:3そうではなく、競技者の場合と同じです。この世で富む人は、競技者のことを自分にも当てはめて考えなさい。小さく滅びるものを、大きく朽ちないものに比べることにはなりますが。3:4実際、競技者のうち、ある者は、勝って冠を得られるという望みを捨てて、競技にまったく名を連ねませんでした。また、ある者は、この望みを心に抱きながらも、労苦と練習とふさわしい食事とを受け入れませんでした。そのため、冠を得られずに終わり、望みを果たせませんでした。3:5それと同じように、この地上の衣をまとっている人も、はじめから、自分を救い主の競技から締め出してはなりません。信仰を持ち、人を愛する神の心の大きさを見ているのですから、なおさらです。また反対に、鍛錬もせず、競い合いもしないままで、朽ちない冠にあずかれると望んでもなりません（第一コリント九・二五）。ちりにまみれず、汗も流さずに、です。3:6そうではなく、自分から進んで、ロゴスをコーチとし、キリストを競技の主催者として、その下に身を置きなさい。定められた食べ物と飲み物は、主の新しい契約としなさい。練習は戒めとし、身だしなみと飾りは、美しい心の構えとしなさい。それは、愛、信仰、望み、真理の知識[5]、柔和、あわれみ、威厳です。そうすれば、終わりのラッパが、競走と、ここからの旅立ちとの合図を鳴らすときが来ます。人生という競技場から出て行くときです。そのとき、正しい良心をもって、賞を授けるかたの前に勝利者として立つことができます。上にある故郷にふさわしいと認められて、冠と御使いたちの告げる声とともに、そこへ帰って行くのです。

4:1そこで、ここから話を始めます。救い主が、わたしたちに、真実で、ふさわしく、救いになることを兄弟たちに語らせてくださいますように。まず望みそのものについて、次に、望みへ近づく道についてです。4:2救い主は、乞う者に恵みを与え、求める者を教え、無知を解き、絶望を振り払ってくださいます。富む人々についての同じ言葉を、もう一度持ち出してくださるのです。その言葉は、自分自身の通訳となり、確かな解き明かし手となります。4:3その言葉そのものを、もう一度聞くのが何よりだからです。福音書の中のこの言葉は、今までわたしたちを動揺させてきました。わたしたちが幼さのために、よく吟味もせず、誤って聞いていたからです。4:4『道に出て行かれると、ある人が近寄ってきて、ひざまずいて言った。4:5「よき師よ、永遠のいのちを受け継ぐためには、何をしたらよいでしょうか」。イエスは言われた。「なぜわたしをよき者と言うのか。神ひとりのほかに、よい者はいない。戒めはあなたの知っているとおりである。『姦淫するな、殺すな、盗むな、偽証を立てるな、あなたの父と母とを敬え』」。4:6彼は答えて言った。「それらのことはみな、若い時から守っております」。イエスは彼に目をとめ、いつくしんで言われた。「あなたに足りないことが一つある。もし完全になりたいと思うなら、持っているものをみな売り払って、貧しい人々に分けてやりなさい。そうすれば、天に宝を持つようになろう。そして、わたしに従ってきなさい」。4:7彼はこの言葉に顔を曇らせ、悲しみながら立ち去った。4:8たくさんの財産と畑を持っていたからである。それから、イエスは見まわして、弟子たちに言われた。「財産のある者が神の国にはいるのは、なんとむずかしいことであろう」。弟子たちはこの言葉に驚き怪しんだ。4:9イエスは更に答えて言われた。「子たちよ、財産をたのみとする者が神の国にはいるのは、なんとむずかしいことであろう。富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通ってはいる方が、たやすい」。すると、彼らはますます驚いて言った。「それでは、だれが救われることができるのだろう」。イエスは彼らを見つめて言われた。「人にはできないことも、神にはできる」。4:10ペテロがイエスに言い出した。「ごらんなさい、わたしたちはいっさいを捨てて、あなたに従って参りました」。イエスは答えられた。「よく聞いておくがよい。だれでもわたしのために、また福音のために、自分のもの、両親、兄弟、財産を捨てた者は、その百倍を受ける。今この時に、畑や財産や家や兄弟を、迫害と共に持つことが、何になろうか[6]。しかし、きたるべき時には、永遠のいのちがある。先の者はあとになり、あとの者は先になるであろう」』（マルコ一〇・一七〜三一）。

訳注

1 この文には、写本で語が欠けているところが二か所ある。

2 前の欠けのため、文の途中から始まる。

3　写本はこの文の四か所に空白を残すが、文はそのままで通じる。
4　ここで写本に語が欠けている。
5　ここで写本に語が欠けている。
6　今のマルコによる福音書にはない句。二五章でも同じ形で引かれる。

5〜10章　言葉の隠れた意味と、律法を超える一つのこと

5:1 以上は、マルコによる福音書に書かれていることです。ほかの、認められているすべての福音書でも、言葉はところどころ少しずつ違うかもしれません。しかし、どれも同じ考えで一致していることを示しています。5:2 救い主は、何一つ人間の仕方では教えておられません。すべてを、神の、奥義に満ちた知恵によって、ご自分の者たちに教えておられます。わたしたちはこのことをはっきり知っているのですから、語られた言葉を肉的に聞いてはなりません。そうではなく、言葉の中に隠された意味を、ふさわしい探究と悟りとをもって尋ね求め、学び取らなければなりません。5:3 実際、主ご自身が弟子たちにわかりやすく語られたと思われる言葉があります。そうした言葉でさえ、なぞのように語られた言葉に比べて、注意が少なくてすむのではありません。むしろ、今もなお、いっそう多くの注意が要ることがわかります。その中にある思慮の豊かさが、並外れているからです。5:4 主が内にいる者たちに開いて示されたと考えられている言葉があります。主が御国の子たちと呼ばれる、まさにその者たちに、です。そうした言葉でさえ、なお多くの思案が要ります。そうであれば、次のような言葉は、なおさらです。それは、ただ単純に語られたように見え、そのために聞いた者たちが問いただすこともしなかった言葉です。しかし、救いの目的そのもの全体に関わり、驚くべき、天を超えた思いの深みに覆われている言葉です。そのような言葉を、耳でうわべだけ受け取るのはふさわしくありません。そうではなく、救い主の霊そのものと、そのお考えの言い表しがたい奥へと、心を深く降ろして受け取るべきです。

6:1 実際、わたしたちの主であり救い主であるかたは、ご自分に最もふさわしい問いを、快く受けられました。いのちであるかたが、いのちについて問いを受けられたのです。救い主が救いについて、師が教えられる教えの要について、問いを受けられたのです。真理であるかたがまことの不死について、ロゴスが父の言葉について、問いを受けられたのです。完全なかたが完全な安息について、朽ちないかたが確かな朽ちないことについて、問いを受けられたのです。6:2 主は、ご自分が下って来られた目的であることについて、問いを受けられました。主がしつけ、教え、与えておられることについてです。それは、福音の主題を示すためでした。福音は、永遠のいのちの贈り物だということです。6:3 主は神として、ご自分がどんな問いを受けられるかも、人がご自分に何と答えるかも、前もって知っておられます。実際、預言者たちの預言者であり、すべての預言の霊の主であるかたにまさって、それを知る者がいるでしょうか。6:4 主は「よき」者と呼ばれると、まずこの言葉そのものを手がかりにして、そこから教えを始められます。教えを受けに来た者の目を、よい神に向けさせるのです。この神は第一のかたであり、永遠のいのちを分け与える、ただひとりのかたです。子は、そのいのちを神から受けて、わたしたちに与えてくださいます。

7:1 それなら、いのちに至るための学びのうちで、最も大きく、最も肝心なものを、初めからすぐに魂に納めておかなければなりません。それは神を知ることです。神は永遠であり、永遠のものを与えるかたです。第一の、至高のかたであり、ただひとりの、よい神です。この神は、知識と理解によって得ることができます。7:2 これこそ、いのちの変わらない、揺るがない初めであり、土台だからです。それは、まことに存在する神を知ることです。神は、存在するもの、すなわち永遠のものを与えてくださいます。ほかのものが存在することも、存続することを受けることも、この神から来るのです。7:3 この神を知らないことは死であり、神を深く知り、神と親しくなり、神を愛し、神に似る者となることだけがいのちだからです。

8:1 ですから、主は、まことのいのちを生きようとする者に、まずこの神を深く知るように勧めておられます。この神を知る者は、『子と、子があらわす者とのほかに、だれもありません』（マタイ一一・二七）。次に、神に次いで、救い主の偉大さと、恵みの新しさとを学ぶように勧めておられます。使徒の言うとおりで

す。『律法はモーセをとおして与えられ、めぐみとまことは、イエス・キリストをとおして』（ヨハネ一・一七）。忠実な僕によって与えられるものは、まことの子が贈ってくださるものと等しくありません。8:2 そもそも、もしモーセの律法が永遠のいのちを与えるのに十分であったとしましょう。そうなら、救い主ご自身が来て、わたしたちのために苦しまれたことはむだになります。誕生から十字架のしるしに至るまで、人としての道を走り通されたことも、むだになります。また、律法の戒めをすべて『若い時から』行ってきた者が、ひざまずいて、ほかのかたに不死を求めることも、むだになります。8:3 実際、彼は律法を満たしていただけではありません。ごく若い年ごろから、そうし始めてもいたのです。というのも、若い欲望や、煮えたぎる怒りや、財産への愛は、不正を生むものです。老年がそういう不正を生まなくても、それのどこが大きく、際立って輝かしいことでしょうか。しかし、若さの跳ね回りと年ごろの熱気の中で、年に先んじた、熟した老成の思いを示す者がいれば、その人こそ驚くべき闘士です。際立った人であり、思いの上では白髪の老人です。8:4 しかし、それでもこの人は、はっきりと確信しています。義については自分に何も欠けていないが、いのちはまったく欠けている、と。そのため、いのちを、それを与えることがおできになる、ただひとりのかたに求めるのです。律法に対しては大胆に語りますが、神の子には嘆願します。8:5 彼は『信仰から信仰へ』と移ります（ローマ一・一七）。律法の中では危うく揺られ、危ない泊まり場に船をつないでいたので、救い主のもとへ船を移すのです。

9:1 現に、イエスは、彼が律法のことをすべて満たしてはいないと言って、責められはしません。そうではなく、彼をいつくしみ、学んだことに素直に従ってきたことを、心から喜ばれます。しかし、永遠のいのちについては、完全ではないと言われます。完全なことを満たしてはおらず、律法の働き手ではあっても、まことのいのちについては何も働いていない者だからです。たしかに、律法の定めも良いものです。だれがそうでないと言うでしょうか。9:2 『戒めは聖』だからです（ローマ七・一二）。ただし、それは養育掛の務めの範囲にとどまります。恐れと下準備の教育によって、イエスの究極の立法と恵みへと進んでいくものです。しかし、『キリストは、すべて信じる者に義を得させるために、律法の完成となられた』のです（ローマ一〇・四）。キリストは、僕のように、人を僕にされるのではありません。そうではなく、父のみこころを行う者たちを、子とし、兄弟とし、共同の相続人とされるのです。

10:1 『もし完全になりたいと思うなら』（マタイ一九・二一）。それなら、彼はまだ完全ではなかったのです。完全なものより完全なものはないからです。そして、主は『思うなら』という一言で、神らしく明らかにされました。ご自分と語り合う魂が、自分で決める自由を持っていることを、です。選ぶことは、自由な者として人にかかっていましたが、与えることは、主として神にかかっていたからです。10:2 神は、望み、ひたすら励み、願い求める者に与えてくださいます。そうして救いが、その人たち自身のものとなるためです。神は無理強いをなさらないからです。力ずくは神に敵するものだからです。そうではなく、捜す者には見いださせ、求める者には与え、門をたたく者には開いてくださいます（マタイ七・七）。10:3 ですから、もしあなたがそう思うなら、本当にそう思っていて、自分を欺いているのでないなら、足りないものを手に入れなさい。『あなたに足りないことが一つある』（マルコ一〇・二一）。その一つとは、わたしのもの、よいもの、すでに律法を超えたものです。律法が与えないもの、律法には収まらないもの、生きている者に固有のものです。10:4 はたして、この人は、律法のことをすべて『若い時から』満たし、大それたことを誇ってきました。それなのに、この一つを、すべてに加えることができませんでした。それは救い主に特有のものであり、望んでいる永遠のいのちを受けるためのものでした。そうではなく、彼は不快に思って立ち去りました。いのちを求めて嘆願していたのに、そのいのちの命令に腹を立てたのです。10:5 彼は、口で言うようには、本当にいのちを望んではいなかったからです。そうではなく、よい志という評判だけを身にまとっていたのです。多くのことには携わることができても、一つのこと、いのちのわざを成し遂げることには、力がなく、気が進まず、弱かったのです。10:6 これは、救い主がマルタに言われたことに似ています。マルタは、多くのことに携わり、引き回され、もてなしのことで心を乱していました。そして、妹を責めました。妹が仕えることを放り出して、主の足もとにすわり、弟子として学ぶ時を過ごしていたからです。主は言われました。『あなたは多くのことに心を乱してい

る。しかし、マリヤはその良い方を選んだのだ。そしてそれは、彼女から取り去ってはならないものである』（ルカ一〇・四一～四二）。10:7 それと同じように、主はこの人にも、多くのことに手を出すのをやめるように命じられました。

そして、一つのことに打ち込み、そのそばにすわっているように、と。永遠のいのちを加えてくださるかたの恵みに、です。

11〜15章　持ち物を売り払うことの意味と、道具としての富

11:1 では、彼を逃げ出させ、師から離れ去らせたものは、何だったのでしょうか。嘆願からも、望みからも、いのちからも、それまでの労苦からも、離れ去らせたものです。11:2『あなたの持ち物を売り払いなさい』（マタイ一九・二一）。これはどういうことでしょうか。ある人々が早合点して受け取るように、今ある財を投げ捨て、財産から離れるように命じておられるのではありません。そうではなく、財産についての考えを、魂から追い出すようにということです。財産への執着、度を越した欲望、財産をめぐるおびえと病、思い煩い、すなわち生活のいばらです。それが、いのちの種をふさぐのです。11:3 いのちのためでもないのに、むやみに財産に乏しいことは、偉大なことでも、うらやむべきことでもないからです。もしそうなら、まったく何も持たない人々が、最も幸いで、最も神に愛され、彼らだけが永遠のいのちを持っていることになります。寄る辺がなく、日々の糧を物乞いする人々、道ばたに倒れている貧しい人々のことです。それも、ただ極度に乏しく、生活の手だてがなく、ごくわずかなものにも事欠いている、そのことだけによってです。彼らが神も『神の義』も『知らない』としても、です。11:4 また、富を退けて、貧しい人々や祖国に施すことも、新しいことではありません。救い主が下って来られる前に、多くの人がそうしてきました。ある人々は、学問に打ち込む暇と、死んだ知恵のために。ある人々は、むなしい評判と虚栄のためにです。アナクサゴラスやデモクリトスやクラテスのような人々です。

12:1 それでは、なぜ主は、前の人々を救わなかったことを命じておられるのでしょうか。新しいこと、神に固有のこと、ただそれだけがいのちを与えることとして、です。神の子は『新しく造られた者』です。もしその神の子が、格別なことを示して教えておられるなら、それは、ほかの人々がしてきた、目に見えることではありません。そうではなく、主が勧めておられるのは、それによって示されている別のこと、より大きく、より神的で、より完全なことです。それは、魂のものと心の構えから、内に潜む情念をはぎ取って裸にすることです。心にとって異質なものを根こそぎ切り取って、外へ投げ出すことです。これこそ、信じる者に固有の学びであり、救い主にふさわしい教えだからです。12:2 実際、前の人々は、外のものを軽んじて、資産を手放し、売り払ってしまいました。しかし、魂の情念は、かえって強めたのだと思います。人を超えたことを成し遂げたかのように、高ぶりと思い上がりと虚栄と、ほかの人々への侮りに陥ったからです。12:3 それなら、どうして救い主が、永遠に生きることになる者たちに、害となり、損なうものを勧められるでしょうか。ご自分が約束しておられるいのちに対して、です。12:4 また、こういうこともあるからです。所有という重荷を下ろしても、なお財産への欲望と渇望を、しみ込んだまま、自分とともに生きたまま持っていることがあります。そして、財産を使うことは捨て去っても、使い果たしたものに事欠き、またそれを恋しがって、二重に苦しむのです。役に立ってくれるものがないことと、後悔がいつも一緒にいることとによって、です。12:5 生活に欠かせないものに事欠いている人は、どうにかして、どこからでもそれを手に入れようとします。そうしながら、心がくじけず、より良いことから気をそらさずにいることは、とうていできないからです。

13:1 それよりも、反対のことのほうが、どれほど役に立つでしょうか。十分なものを持っていて、自分自身も所有のことで苦しまず、助けるべき人々を助けることです。実際、だれも何一つ持っていなかったら、人々のあいだにどんな分かち合いが残るでしょうか。13:2 また、この考えは、主のほかの多くの、良い教えに、はっきりと逆らい、争うものとならないでしょうか。13:3『不正の富を用いて、自分のために友だちをつくるがよい。そうすれば、富が無くなった場合、あなたがたを永遠のすまいに迎えてくれるであろう』（ルカ一六・九）。『虫も食わず、さびもつかず、盗人らが押し入ることもない天に、宝を得なさい』（マタイ六・二〇）。13:4 もし各人が、まず自分から、これらすべてに事欠いてしまって

いたらどうでしょう。どうして、飢えている人に食べさせ、かわいている人に飲ませ、裸の人に着せ、宿のない人を迎え入れることができるでしょうか。これらをしない者たちに、主は火と外の暗やみをもっておどしておられるのです。13:5それどころか、主ご自身が、ザアカイとレビ[1]とマタイという、富む人であり取税人である人々の客となられます。主は彼らに、財産を手放すようには命じられません。そうではなく、正しい使い方を課し、不正な使い方を取り除いて、こう告げられるのです。13:6『きょう、救がこの家にきた』（ルカ一九・九）。主は、彼らの財産の用い方を、このようにほめておられます。そのため、この言葉に加えて、分かち合いを命じておられるほどです。かわいている人に飲ませ、飢えている人にパンを与え、宿のない人を迎え、裸の人に着せることです。13:7しかし、こうした必要は、財産によらなければ満たすことができません。それなのに、主が財産から離れるように命じておられるとしたら、主のしておられることは何になるでしょうか。同じことを、与えよとも与えるなとも勧めることにしかならないではありませんか。養えとも養うなとも、迎えよとも締め出せとも、分かち合えとも分かち合うなとも、です。これこそ、あらゆることのうちで、最も理屈に合わないことです。

14:1ですから、隣人の役にも立つ財産を、投げ捨ててはなりません。資産は得られるものであり、財産は役に立つものであって、人が使うようにと神が備えてくださったものだからです。それは、使い方を知っている者たちのそばに置かれ、よい使い方のために差し出されています。材料や道具のようにです。14:2道具は、あなたが技をもって使えば、技にかなったものになります。あなたが技に欠けていれば、あなたの不器用さの影響を受けます。道具そのものには責めがないのに、です。14:3富も、そのような道具です。あなたは富を正しく使うことができます。そうすれば、富は義に仕えます。だれかが富を不正に使えば、今度は不正に仕えるものとなります。14:4富は、もともと仕えるものであって、支配するものではないからです。ですから、それ自体では善も悪も持たないもの、責めのないものを、責めてはなりません。そうではなく、それらを良くも悪くも使うことができ、自分が選ぶとおりに使うものを責めるべきです。それこそが、まさにその点で責めを負うものです。それは人の心です。人の心は、自分の内に自由な判断の力を持ち、与えられたものの扱いを自分で決める自由を持っています。14:5ですから、人は、魂の情念をさしおいて、資産を滅ぼしてはなりません。持ち物をよりよく使うことを許さない情念を、です。そうして、りっぱで善い人となり、こうした資産をも、りっぱに使うことができるようになるためです。14:6つまり、すべての持ち物を捨て、持ち物をことごとく売り払うということは、このように受け取らなければなりません（ルカ一四・三三、マタイ一九・二一）。魂の情念について言われたこととして、です。

15:1わたしとしては、こうも言いたいのです。あるものは魂の内にあり、あるものは外にあります。外のものは、魂がそれを良く使えば、それも良いものと見え、悪く使えば、悪いものと見えます。それなら、持ち物を手放すように命じておられるかたは、どちらを退けるように言っておられるのでしょうか。取り除かれても、なお情念が残るほうでしょうか。それとも、むしろ、取り除かれれば資産までも役に立つものとなるほうでしょうか。15:2ですから、この世の有り余る財を捨て去った人も、なお情念には富んでいることができます。材料がそこになくても、です。心の構えは、自分の働きをし、理性の首を締め、押さえつけ、ともに育った欲望で燃え上がるからです。それで、財産に貧しくなっても、情念に富んでいるなら、その人には何の益にもならなかったのです。15:3彼は、捨て去るべきものを捨て去ったのではなく、善でも悪でもないものを捨て去ったからです。そして、仕えてくれるものから自分を切り離し、外のものに乏しくなったことで、生まれつきの悪の材料に火をつけたのです。15:4ですから、捨てなければならないのは、害になる持ち物です。正しい使い方を知っていれば、人のためにも役立つことのできる持ち物ではありません。15:5思慮と節制と敬虔をもって管理されるものは、役に立ちます。損をもたらすものは、押しのけなければなりません。しかし、外のものは害を与えません。15:6こうして、主は、外のものを用いることも認めておられます。主が脱ぎ捨てるように命じておられるのは、生きるのに必要なものではなく、それを悪く使うものです。それは、魂の病と情念のことだったのです。

訳注

1 『レビ』は学者の推定で、写本では別の語になっている。

16〜19章　魂の中の富と、本当の富む人・貧しい人

16:1 これらに富むことは、それがあれば、だれにとっても死をもたらし、それが滅びれば、救いをもたらします。人は、この富から清くなった魂、すなわち貧しく裸になった魂を差し出さなければなりません。そうしてこそ、救い主がこう言われるのを聞くことができるのです。『わたしに従ってきなさい』（マルコ一〇・二一）。16:2 心の清い人には、主ご自身が、もう道となってくださるからです。しかし、汚れた魂に、神の恵みは忍び込みません。汚れているのは、欲望に富み、世の多くの恋慕を宿して苦しんでいる魂です。16:3 実際、資産や金や銀や家を、神の賜物として持っている人がいます。その人は、それらを用いて、人々の救いのために、与えてくださる神に仕えます。それらを持っているのは、自分のためよりも、むしろ兄弟たちのためだと知っています。それらの所有にまさる者であって、持っているものの奴隷ではありません。それらを魂の中に持ち歩くことも、それらで自分のいのちを区切り、囲い込むこともしません。そうではなく、いつも何か美しい、神的な働きに励んでいます。たとえいつか、それらを奪われなければならないとしても、穏やかな心で耐えることができます。有り余る財を持つことに耐えるのと同じように、それを失うことにも耐えるのです。この人こそ、主が幸いだと言われ、霊において貧しいと呼ばれる人です（マタイ五・三）。天国をすぐにも受け継ぐ者であって、生きることのできない富む人ではありません。

17:1 一方、富を魂の中に持ち歩く人がいます。神の霊の代わりに、心の中に金や畑を持ち歩き、所有をいつも際限なく増やし、そのたびに、より多くのものに目を向けています。下にうつむき、世のわなに足を縛られています。土であって、土に帰っていく者です。心ではなく、畑や鉱山を身に帯びている人です。自分の選んだもののうちに、必ず見いだされることになる人です。そのような人が、どうして天国を慕い、気にかけることができるでしょうか。『人の思いのある所には、その宝もあるからである』（マタイ六・二一）[1]。17:2 ところで、主は、二つの宝を知っておられます。一つは良い宝です。『善人は、心の良い宝から良い物を取り出す』とあるからです（ルカ六・四五）。もう一つは悪い宝です。『悪人は、悪い宝から悪い物を取り出す。心からあふれ出ることを、口が語るからである』とあるからです（ルカ六・四五）。17:3 それで、わたしたちのもとでもそうであるように、主のもとでも、宝は一つだけではありません。見つけたときに思いがけない大きな利益をもたらす宝のほかに、第二の宝もあります。利益がなく、うらやむに足りず、手に入れにくく、損をもたらす宝です。それと同じように、富にも、良いものの富と、悪いものの富とがあります。富と宝とは、本来、互いに切り離されたものではないと、わたしたちは知っているのですから。17:4 そして、ある富は、手に入れるべきもの、身にまとうべきものでしょう。ある富は、手に入れてはならず、捨て去るべきものです。同じように、貧しさについても、幸いなのは霊的な貧しさです。17:5 そのため、マタイは付け加えたのです。『貧しい人たちは、さいわいである』。どのようにでしょうか。『霊において』です（マタイ五・三）。またこうもあります。『神の義に飢えかわいている人たちは、さいわいである』（マタイ五・六）。そうであれば、それと反対の貧しい人々はみじめです。神にあずからず、人間の所有にはなおさらあずからず、神の義を味わったこともない人々です。

18:1 ですから、神の国にはいるのがむずかしいと言われた富む人々のことは、学ぶ者として聞き取らなければなりません（マルコ一〇・二三）。愚かに、粗野に、肉に従って聞いてはなりません。そのように言われたのではないからです。救いは、外のものにかかっているのでもありません。それが多いか少ないか、小さいか大きいか、名誉あるものか不名誉なものか、評判のよいものか悪いものかによるのではありません。そうではなく、魂の徳にかかっています。信仰、希望、愛、兄弟愛、知識、柔和、高ぶらないこと、真実です。救いは、これらに与えられる賞なのです。18:2 からだが美しいからといって、人が生きるのでも、反

対に滅びるのでもないからです。そうではなく、与えられたからだを清く、神に従って使う人は生きます。神の宮を滅ぼす人は、滅ぼされます（第一コリント三・一七）。18:3 醜い人がみだらにふるまうこともあれば、美しい人が慎み深くあることもあります。からだの強さや大きさが、いのちを与えるのでもなく、手足が取るに足りないことが、滅ぼすのでもありません。そうではなく、どちらの場合も、その原因となるのは、それらを使う魂です。18:4 現に、主は、顔を打たれても耐え忍びなさいと言われます（ルカ六・二九、マタイ五・三九）。この言葉には、力が強く、からだの丈夫な人でも従うことができます。反対に、からだの弱い人でも、心の抑えがきかないために、背くことがあります。18:5 同じように、乏しく、生活の手だてのない人が、欲望に酔っているのが見いだされることもあるでしょう。また、財産に富む人が、しらふで、快楽には貧しいのが見いだされることもあるでしょう。従順で、悟りがあり、清く、節度を保っている人です。18:6 そこで、何よりもまず、生きることになるのが魂であり、魂のまわりに育つ徳は救い、悪徳は死なせるのだとしましょう。それなら、もうはっきりしています。魂は、それに富むことで人が滅ぼされるものに貧しければ、救われます。それに富むことが人をすり減らすものに富めば、死ぬのです。18:7 そして、行く末の原因を、魂の状態と心の構えのほかに求めるのは、もうやめましょう。神に従い、清くあることへ向かう構えか、戒めに背き、悪を積み重ねることへ向かう構えか、です。

19:1 こうして、本当に、また美しく富んでいるのは、徳に富み、どんな境遇も、敬虔に、また忠実に使うことのできる人です。まがいものの富む人とは、肉に従って富み、自分のいのちを外の所有に移してしまった人です。その所有は、過ぎ去り、朽ちていきます。あるときはこの人の、あるときはあの人のものとなり、最後には、だれのものでもまったくなくなるのです。19:2 また同じように、本物の貧しい人もいれば、ほかに、まがいものの、名ばかりの貧しい人もいます。一方は霊に従って貧しい人で、これが固有の貧しさです。もう一方は世に従って貧しい人で、これは異質な貧しさです。19:3 そこで、世に従って貧しくなく、情念に従って富んでいる人に、霊に従って貧しくなく、神に従って富んでいる人が言います。「あなたの魂の中にある、異質な資産から離れなさい。それは、心の清い者となって、神を見るためです。これは、別の言い方をすれば、天国にはいることです。19:4 では、どうすれば、それらから離れられるでしょうか。売り払うことによってです。では、どういうことでしょうか。あなたは資産の代わりに財産を受け取るのでしょうか。富を富と交換し、目に見える財をお金に換えて、ですか。19:5 いいえ、決して。そうではなく、あなたが救いたいと願っている魂の中に、前からあったものの代わりに、別の富を入れることによってです。それは、人を神のようにし、永遠のいのちを与える富、すなわち、神の戒めにかなう心の構えです。その代わりに、あなたには報いと誉れが与えられます。絶えることのない救いと、永遠に朽ちないことです。19:6 こうして、あなたは持ち物を良く売り払うのです。多く、余分で、あなたに天を閉ざしている持ち物を、救うことのできるものと引き換えにするのです。あれらのものは、肉に従って貧しい人々、救うことのできるものに欠けている人々が持つようにしなさい。あなたは、霊の富を代わりに受けて、もう天に宝を持つことになるでしょう」。

訳注

1 福音書では『宝のある所に心もある』。クレメンスは別の著作でもこの形で引く。

20〜23章　弟子たちの恐れと、父を憎むということ

20:1 多くの財産を持ち、律法を守っていたあの人は、これらのことをしかるべく悟りませんでした。同じ人が、どのようにして貧しくもあり、富んでもいることができるのか、ということも悟りませんでした。財産を持ちながら持たず、世を使いながら使わないでいることができるのか、ということもです。それで、顔を曇らせ、うなだれて立ち去りました。いのちの持ち場を捨てたのです。そのいのちを、彼はただ望むことはできても、手に入れることはできませんでした。むずかしいことを、自分で自分に、できないことにしてしまったのです。20:2 目に見える富には、なまめかしく華やかな魅惑が付きまといます。それによって魂が引き回されず、目をくらまされないことは、むずかしかったからです。しかし、その中にあっても救いをつかむことは、できないことではありませんでした。人が、感覚でとらえる富から、思いでとらえる富、神に教えられる富へと自分を移せばよいのです。そして、善でも悪でもないものを、良く、ふさわしく使い、永遠のいのちへと向かって進むように使うことを学べばよいのです。20:3 弟子たちも、はじめは、やはりひどく恐れ、うろたえました。それを聞いて、いったいなぜ、そうなったのでしょうか。彼ら自身も、多くの財産を持っていたからでしょうか。それどころか、彼らは、小さな網や釣り針や漁の小舟さえ、とうに捨てていました。それだけが、彼らの持ち物だったのです。20:4 では、なぜ恐れて、『だれが救われることができるのだろう』と言うのでしょうか（マルコ一〇・二六）。彼らは、主がたとえで、はっきりしない形で語られたことを、弟子として良く聞き、その言葉の深みを悟ったのです。20:5 たしかに、財産のことでは、何も持っていないので、彼らは救いに望みをもっていました。しかし、自分たちがまだ情念を脱ぎ捨てきっていないことを、自分で知っていました。学び始めたばかりで、つい先ごろ救い主に召し集められたばかりだったからです。それで、『ますます驚いて』、自分たちに絶望しました（マルコ一〇・二六）。あの多くの財産を持ち、所有にひどくしがみついていた人に、少しも劣らず絶望したのです。その人は、所有を、永遠のいのちより先に選んだのでした。20:6 ですから、弟子たちが恐れたのは、まったくもっともでした。財産を持っている人も、情念をはらんでいる人も、同じように天から締め出されるのならです。彼ら自身も、その情念に富んでいたのです。救いは、情念のない、清い魂のものだからです。

21:1 しかし、主は答えられます。『人にはできないことも、神にはできる』（マルコ一〇・二七）。これもまた、大きな知恵に満ちています。人は、自分だけで情念から自由になろうと修練し、骨折っても、何も成し遂げません。しかし、それを強く望み、熱心に努めていることが明らかになるなら、神からの力が加わって、打ち勝つのです。21:2 神は、望む魂には、ともに息を吹き込んでくださるからです。しかし、魂が熱意から離れるなら、神から与えられた霊も縮んでしまいます。望まない者を救うのは、力ずくでする者のすることであり、選ぶ者を救うのは、恵みを与える者のすることだからです。21:3 神の国は、眠っている者や怠けている者のものでもありません。そうではなく、『力ずくの者たちがそれを奪い取っている』のです（マタイ一一・一二）。これだけが、美しい力ずくだからです。神に力ずくで迫り、神からいのちを奪い取ることです。神は、力ずくで、いやむしろ揺るぎなく、しがみつく者たちを知って、譲ってくださいます。神は、このようなことで負けるのを喜ばれるからです。21:4 ですから、幸いなペテロはこれを聞くと、その言葉をすばやく奪い取り、意味を悟りました。ペテロは、選ばれた者、抜きん出た者、弟子たちの第一の者です。救い主は、彼のためにだけ、ご自分の分とともに税を納められたのです。21:5 そして、何と言っているでしょうか。『ごらんなさい、わたしたちはいっさいを捨てて、あなたに従って参りました』（マルコ一〇・二八）。もし、この『いっさい』で、自分の資産のことを言っているのなら、どうでしょう。ペテロは、ことわざに言う四オボロスほどのものを、たぶん残してきて、誇っていることになります。そして、天国をそれと同じ値打ちのものだと示していることに、気づかずにいるでしょう。21:6

しかし、弟子たちが、先ほどから述べている古い、思いの中の資産と魂の病を投げ捨てて、師の足跡に従っていくのなら、どうでしょう。このことは、もう天に名を記されることになる人々にこそ、当てはまるでしょう。21:7 本当に救い主に従うとは、このことだからです。救い主の罪のなさと完全さを追い求めることです。鏡を見るように救い主に向かって魂を飾り、調え、すべてを、どこまでも救い主と同じように整えることです。

22:1『イエスは答えられた。「よく聞いておくがよい。だれでもわたしのために、また福音のために、自分のもの、両親、兄弟、財産を捨てた者は、その百倍を受ける」』（マルコ一〇・二九〜三〇）。22:2 しかし、このことに、わたしたちが心を乱されてはなりません。これよりもっと厳しい、ほかの所で語られた言葉にもです。『父、母、子供、さらに自分の命までも憎まない者は、わたしの弟子となることはできない』（ルカ一四・二六）。22:3 平和の神は、最も親しい者たちを憎み、縁を断つことを勧められるはずがないからです。その神は、敵をさえ愛するようにと勧めておられます。22:4 敵を愛さなければならないのなら、そこから上っていけば、同じ理屈で、血の最も近い者たちも愛さなければなりません。あるいは、血のつながった者たちを憎まなければならないとしましょう。そうなら、言葉は、そこから下っていって、なおさら敵を退けるように教えることになります。そうなれば、二つの言葉は互いに打ち消し合い、誤りとされてしまうでしょう。22:5 しかし、二つの言葉は、打ち消し合うどころではありません。人は、同じ心、同じ心の構えから、同じ基準に立って、父を憎み、敵を愛することができるからです。それは、敵に仕返しをせず、父をキリストよりも敬わない人です。22:6 あちらの言葉では、憎しみと悪を行うことを断ち切っておられるからです。こちらの言葉では、身内への遠慮を、それが救いを損なうのなら、断ち切っておられます。22:7 そもそも、ある人に、神を知らない父や子や兄弟がいて、それが信仰の妨げとなり、天上のいのちの障害となるとしましょう。その人は、その身内と歩調を合わせてはならず、心を合わせてもなりません。そうではなく、霊の敵対のゆえに、肉の親しさを断ち切りなさい。

23:1 この事柄を、二人が争う訴訟だと考えなさい。一方では、父がその場に立って、こう言っているとしなさい。「わたしがおまえをもうけ、育てたのだ。わたしに従ってこい。一緒に不正を行え。キリストの律法の言うことを聞くな」。そのほか、神を冒瀆する人、生まれつき死んでいる人が言いそうなことを、何でも言っているとしなさい。23:2 他方では、救い主の言葉を聞きなさい。「わたしは、世によって死へと不幸に生み出されていたあなたを、新たに生まれさせた。自由にし、いやし、あがなった。わたしは、あなたに、絶えることのない、永遠の、世を超えたいのちを与えよう。わたしは、あなたに、よき父なる神の御顔を見せよう。『地上のだれをも、自分の父と呼んではならない』（マタイ二三・九）。『死人を葬ることは、死人に任せておくがよい。あなたは、わたしに従ってきなさい』（マタイ八・二二、ルカ九・六〇）。23:3 わたしは、あなたを、言い表せず、語りえない、よいものの安息と楽しみへと導き上るからだ。そのよいものとは、『目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかったもの』である。『御使たちもうかがい見て、神が聖徒たちと、ご自分を愛する子らのために備えられたよいものを見たいと願っているもの』である（第一コリント二・九、第一ペテロ一・一二）。23:4 わたしは、あなたを養う者として、わたし自身をパンとして与える。それを味わった者は、もはやだれも死を経験しない。また、日ごとに不死の飲み物を与える。わたしは、天を超えた教えの師だ。あなたのために、わたしは死と戦い抜き、あなたの死の代価を支払った。それは、あなたが、以前に犯した罪と、神への不信仰のために負っていた死である」。23:5 両方の側からこれらの言葉を聞いたうえで、あなたは、自分のために判決を下しなさい。自分の救いのために票を投じなさい。兄弟や子供や妻や、ほかのだれが同じようなことを言っても、何にもまして、あなたの内ではキリストが勝利者となるようにしなさい。キリストは、あなたのために戦っておられるからです。

24〜27章　内なる迫害と、富む人に残された望み

24:1 あなたは、財産よりも上に立っていることができますか。そう言いなさい。そうすれば、キリストはあなたを所有から引き離されません。主は物惜しみをなさいません。しかし、自分が財産に負かされ、ひっくり返されているのが見えますか。手放しなさい。投げ捨てなさい。憎みなさい。捨てなさい。逃げなさい。24:2『もしあなたの右の目が罪を犯させるなら、すぐにそれを切り取りなさい』（マタイ五・二九）。片目で神の国を得るほうが、五体満足で火を受けるよりも望ましいのです（マルコ九・四七）。手でも、足でも、命でも、それを憎みなさい。命がここでキリストのために失われるなら、かしこで救われるからです。

25:1 次の言葉も、同じようにこの考えにつながっています。『今この時に、畑や財産や家や兄弟を、迫害と共に持つことが、何になろうか』（マルコ一〇・三〇）。25:2 実際、主は、財産のない人や、家のない人や、兄弟のない人を、いのちへと招かれるのではありません。富む人々をも招かれたのですから。ただし、先に述べたような仕方でです。兄弟たちも、同じように招かれました。ペテロとアンデレ、ゼベダイの子らであるヤコブとヨハネのようにです。ただし、互いに、またキリストと、心を一つにしている兄弟たちです。25:3『迫害と共に』という句は、これらのものを一つ一つ、そのように持つことを退けています。迫害には、外から人々によって起こるものがあります。人々が、敵意やねたみや利をむさぼる心から、あるいは悪魔の働きによって、信じる者たちを追い立てるのです。25:4 しかし、最もつらい迫害は内にあります。それは、各人の魂そのものから送り出されます。その魂は、神を認めない欲望、さまざまな快楽、卑しい望み、滅びをもたらす夢想に損なわれているのです。魂が、より多くのものをいつも求め、荒々しい恋情に狂い、燃え上がるとき、そうなります。そのとき魂は、身に付きまとう情念に、突き棒や虻に刺されるようにして血を流します。そして、狂ったような熱中へ、いのちへの絶望へ、神を侮ることへと駆られるのです。25:5 この迫害のほうが、重く、つらいのです。それは内から起こり、いつも共にいます。迫害される者は、それから逃れることさえできません。25:6 その人は、敵を自分の中に抱えて、どこへでも連れて歩いているからです。火も同じです。外から襲う火は試練を生みますが、内からの火は死をもたらします。戦いも、外から仕掛けられるものはたやすく終わりますが、魂の中の戦いは死に至るまで続きます。25:7 このような迫害と共に、感覚でとらえる富を持っているとしましょう。また、血のつながった兄弟や、そのほかの担保を持っているとしましょう。それなら、それらをすべて抱え込んで害を招くことを、置き去りにしなさい。自分に平和を与えなさい。長い迫害から自由になりなさい。あれらのものから福音へと向き直りなさい。何にもまして救い主を選びなさい。あなたの魂の弁護者であり、助け主であるかた、限りないいのちを治めるかたを選びなさい。25:8『見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづく』からです（第二コリント四・一八）。今の時にあるものは、たちまち尽き、確かではありません。『しかし、きたるべき時には、永遠のいのちがある』のです（マルコ一〇・三〇）。

26:1『先の者はあとになり、あとの者は先になるであろう』（マルコ一〇・三一）。この言葉は、隠れた意味と解き明かしの上では豊かです。しかし、今ここで探ることは求めません。この言葉は、多くの資産を持つ人々にだけ向けられているのではないからです。そうではなく、信仰にひとたび身をゆだねたすべての人々に、区別なく向けられています。ですから、これは今はおいておきましょう。26:2 わたしたちが取り上げたことは、約束したことに少しも欠けることなく、示されたとわたしは思います。すなわち、救い主は、富む人々を、富そのものや所有のゆたかさのゆえに締め出されたことは決してありません。彼らに対して、救いを堀で隔てられたこともありません。ただし、彼らが神の戒めに身をかがめて従うことができ、またそう望むならです。また、一時的なものよりも自分のいのちを重んじ、主にひたと目を注ぐならです。よい舵取りの合図を見つめる

者のように、主が何を望まれ、何を命じられ、何を示されるかを見つめるならです。ご自分の水夫たちにどんな合図を与えられるか、港がどこにあり、どこから向かうかを告げられるかを見つめるならです。26:3 実際、ある人が、信仰に入る前に心を配り、倹約して、十分な生活の資を集めたとしましょう。それで何の不正を行ったことになるでしょうか。あるいは、これよりもっと責められないことがあります。境遇を割り当ててくださる神によって、はじめからそのような人々の家に住まわされた場合です。財産のゆたかな、富によって力のある家に生まれたとしたら、どうでしょう。26:4 もし、望みもしないのに富の中に生まれたために、いのちから追い払われたとしましょう。それなら、その人はむしろ、自分を生み出された神から不正を受けていることになるからです。一時の楽しみにはあずからせてもらいながら、永遠のいのちは奪われているのです。26:5 富が死を用意し、死へと取り次ぐものなら、いったい何のために、地から現れ出なければならなかったのでしょうか。26:6 しかし、もし人が、持ち物が与える力の内側にとどまることができるとしましょう。思い上がらず、慎みを保ち、ただ神を求め、神を呼吸し、神と共に国の民として歩むことができるとしましょう。その人は、貧しい者として戒めの前に立っています。自由で、負かされることがなく、病まず、財産に傷つけられることがありません。26:7 そうでなければ、このような富む人が神の国へと通っていくよりは、らくだが針を通ってはいるほうが早いでしょう（マルコ一〇・二五）。26:8 たしかに、らくだが狭く細い道を通って富む人より先に着くということは、もっと高い何かを示しているとしましょう。それは、原理と神学についての解き明かしの中で、救い主の奥義として学ぶことができます。

27:1 それでも、まず、このたとえの表に現れた意味と、たとえが語られた目的とが、示されるようにしましょう。たとえが、豊かな人々にこう教えるようにしましょう。すでに罪に定められているかのように、自分の救いをおろそかにしてはなりません。また反対に、富を海に沈めてもならず、いのちをねらう敵として罪に定めてもなりません。そうではなく、どのような仕方で、どのように富を使い、いのちを得るかを学ばなければなりません。27:2 実際、人は、富んでいることを恐れているからといって、必ず滅びるのではありません。救われると安心し、信じているからといって、必ず救われるのでもありません。そこで、救い主が彼らにどのような望みを描いて見せておられるかを、考えてみましょう。また、望みのなかったものがどのようにして確かなものとなり、望んだものがどのようにして所有に至るかを、考えてみましょう。27:3 さて、師は、戒めの中でどれが最も大きいかと問いを受けて、こう言われます。『精神をつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ』（マルコ一二・三〇）。そして、これより大きい戒めはない、と言われます。まことにもっともです。27:4 この戒めは、第一の、最も大きなかたについて命じられているからです。それは、わたしたちの父なる神ご自身です。万物は、この神によって生じ、存在し、救われるものは再びこの神へと帰っていきます。27:5 ですから、神はまずわたしたちを愛してくださり、わたしたちは生まれることを得たのです。その神よりも、ほかの何かを尊く、重んじるべきものとすることは、許されません。わたしたちは、最も大きな恵みに対して、この小さな感謝だけをお返しします。何ひとつ欠けるところのない、完全な神へのお返しとして思いつくものは、ほかに何も持っていません。そして、父を愛すること、そのことによって、わたしたちは、それぞれの力と能力に応じて、朽ちないことを受け取ります。人は神を愛するほど、それだけ神の奥深くへと入っていくからです。

28〜32章　隣り人を愛することと、永遠のすまいを得る施し

28:1 順序では第二であり、これより少しも小さくないと主が言っておられるのは、次の戒めです。『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』（マルコ一二・三一）。それなら、神を自分にまさって愛することになります。28:2 語り合っていた人が『隣り人とはだれのことですか』と尋ねました（ルカ一〇・二九）。主は、ユダヤ人たちと同じ仕方で隣り人を定められたのではありません。血のつながった者でも、同じ国の民でも、改宗者でもありません。同じように割礼を受けた者でも、ただ一つの同じ律法を用いる者でもありません。28:3 そうではなく、主は、高い所にあるエルサレムからエリコへ下って行くある人を、話の中に登場させられます。そして、その人が強盗どもに突き刺され、半殺しのまま道に投げ出されているのを示されます。祭司はそばを通り過ぎ、レビ人は見て見ぬふりをします。しかし、ののしられ、締め出されていたサマリヤ人が、その人をあわれみます。サマリヤ人は、あの人々のようにたまたま通りかかったのではありません。そうではなく、危ない目にあった人が必要とするものを用意して、やって来たのです。ぶどう酒、油、ほうたい、家畜、宿屋の主人への支払いです。支払いは、一部はその場で渡し、残りはあとで払うと約束しました（ルカ一〇・三〇〜三五）。主は言われました。『この人たちのうち、だれがひどい目にあった人の隣り人になったか』（ルカ一〇・三六）。28:4 その人は答えました。『その人にあわれみを示した人です。では、あなたも行って、そのようにしなさい』（ルカ一〇・三七）。愛は善い行いを芽生えさせるものだとして、主はこう言われたのです。

29:1 つまり、主は、二つの戒めのどちらでも愛を説いておられます。しかし、その愛を順序によって分けられました。一方では愛の第一の座を神に結びつけ、他方では第二の座を隣り人に割り当てておられます。29:2 では、この隣り人とは、救い主ご自身のほかに、だれでしょうか。あるいは、あのかたにまさってわたしたちをあわれんでくださったのは、だれでしょうか。わたしたちは、やみの世の主権者たちによって、ほとんど殺されかけていたのです。恐れ、欲望、怒り、悲しみ、欺き、快楽という、多くの傷によってです。29:3 これらの傷のただひとりの医者は、イエスです。イエスは情念を根こそぎ切り倒されます。律法のように、結果だけを、つまり悪い木々の実だけを切り取るのではありません。そうではなく、ご自分の斧を悪の根もとに当てられたのです。29:4 このかたこそ、ぶどう酒を、すなわちダビデのぶどうの木の血を、わたしたちの傷ついた魂に注いでくださったかたです。このかたこそ、油を、すなわち父の心の底から出るあわれみを、携えて来て、惜しみなく与えてくださったかたです。このかたこそ、健やかさと救いの、ほどけることのないほうたいを示してくださったかたです。それは、愛、信仰、望みです。このかたこそ、御使いたちと支配と権威に、大きな報いと引き換えに、わたしたちに仕えるよう命じてくださったかたです。というのは、彼ら自身もまた、神の子らの栄光が現れるときに、世のむなしさから解放されることになっているのです。29:5 ですから、このかたを神と等しく愛さなければなりません。そして、キリスト・イエスを愛する者とは、その御旨を行い、その戒めを守る者です。29:6 『わたしにむかって「主よ、主よ」と言う者が、みな天国にはいるのではなく、わが父の御旨を行う者がはいるからである』（マタイ七・二一）。また、『わたしにむかって「主よ、主よ」と言いながら、なぜわたしの言うことを行わないのか』（ルカ六・四六）。また、『義人も預言者も見聞きしなかったことを、見聞きしているあなたがたは、さいわいである』（マタイ一三・一六〜一七）。ただし、主の言われることを行うならば、です。

30:1 つまり、第一はこの人、キリストを愛する人です。第二は、キリストを信じた人々を敬い、大切にする人です。人が弟子に何かをすれば、主はそれをご自分にされたこととして受け取り、残らずご自分のこととされるからです。30:2 『わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい。あなたがたは、わたしが空腹のときに食べ

させ、かわいていたときに飲ませ、旅人であったときに宿を貸してくれたからである。裸であったときに着せ、病気のときに見舞い、獄にいたときに尋ねてくれたからである。30:3 そのとき、正しい者たちは答えて言うであろう。「主よ、いつ、わたしたちは、あなたが空腹であるのを見て食物をめぐみ、かわいているのを見て飲ませましたか。いつ、あなたが旅人であるのを見て宿を貸し、裸なのを見て着せましたか。また、いつ、あなたが病気をしているのを見て見舞いましたか。30:4 また、獄にいるのを見て、あなたの所に参りましたか」。すると、王は答えて言うであろう。「あなたがたによく言っておく。わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである」』（マタイ二五・三四～四〇）。30:5 また反対に、主は、これらのものを彼らに与えなかった者たちを、永遠の火に投げ込まれます。ご自分に与えなかった者として、そうされるのです（マタイ二五・四一～四五）。30:6 また、ほかの所では、こう言われます。『あなたがたを受けいれる者は、わたしを受けいれるのである。あなたがたを受けいれない者は、わたしを拒むのである』（マタイ一〇・四〇、ルカ一〇・一六）。

31:1 主はこの人々を、子たち、子供たち、幼な子、友と呼ばれます。また、彼らが上で持つことになる大きさに比べて、ここでは小さい者と呼ばれます。『これらの小さい者のひとりをも軽んじてはならない。この者たちの御使たちは、天にいますわたしの父のみ顔をいつも仰いでいるからである』と言われるのです（マタイ一八・一〇）。31:2 また、別の所では、『恐れるな、小さい群れよ。天国をあなたがたに渡すことは、父のみこころだからである』と言われます（ルカ一二・三二）。31:3 同じように、主は、女の産んだ者の中で最も大きいヨハネについても言われます。天国で最も小さい者、すなわちご自分の弟子は、ヨハネよりも大きいのです（マタイ一一・一一、ルカ七・二八）。31:4 また、こう言われます。『義人や預言者を、義人や預言者の名のゆえに受けいれる者は、その人たちの報いを受けるであろう。弟子の名のゆえに、弟子に冷たい水一杯を飲ませる者は、その報いを失うことはない』（マタイ一〇・四一～四二）。それなら、失われることのない報いは、これだけです。31:5 さらにまた、こう言われます。『不正の富を用いて、自分のために友だちをつくるがよい。そうすれば、富が無くなった場合、あなたがたを永遠のすまいに迎えてくれるであろう』（ルカ一六・九）。31:6 主はこう言って、示しておられます。人が自分のものとして手もとに抱え、困っている人々との共有に差し出さない所有は、すべて本来、不正なものです。しかし、この不正から、正しいわざ、救いをもたらすわざをすることもできます。父のもとに永遠のすまいを持つ人々のだれかを、休ませることです。31:7 まず、見なさい。主はあなたに、求められ、わずらわされるのを待つようにとは命じておられません。そうではなく、あなたが自分で、よくしてもらうべき人々を探すように命じておられます。救い主のふさわしい弟子である人々をです。31:8 たしかに、使徒の言葉も美しいものです。『神は喜んで施す人を愛してくださるからである』（第二コリント九・七）。それは、与えることを喜び、惜しみながらまくことをしない人です。そのように刈り取ることのないためです。つぶやきも、ためらいも、悲しみもなく分かち合う人です。これこそが、混じりけのない善の施しです。31:9 しかし、これにまさるのは、主が別の箇所で語られた言葉です。『あなたに求める者には、だれにでも与えなさい』（ルカ六・三〇）。このような惜しみない施しは、まことに神のものだからです。しかし、先の言葉は、どんな神々しさをも超えています。求められるのを待つことさえせず、よくしてもらうにふさわしい人を自分から探し求めること。そして、その分かち合いに、永遠のすまいというこれほど大きな報いが定められていることです。

32:1 ああ、なんと美しい商いでしょう。なんと神々しい市場でしょう。人は財産で朽ちないことを買い、世の滅びゆくものを与えて、その代わりに天に永遠の住みかを受け取るのです。32:2 富む人よ、思慮があるなら、この祭りの市へと船出しなさい。必要とあれば、全地をも巡りなさい。危険も苦労も惜しんではなりません。ここで天の御国を買うためです。32:3 透きとおった宝石やエメラルドが、また家が、どうしてそれほどあなたを喜ばせるのでしょうか。家は、火のえじき、時のおもちゃ、地震がついでに壊すもの、暴君のなぶりものにすぎません。32:4 天に住み、神と共に王として治めることを望みなさい。この御国は、神にならう人が、あなたに与えてくれます。その人は、ここで小さなものを受けて、かしこでは代々限りなく、あなたを同じ家に住む者としてくれるのです。32:5 その人が受け取ってくれるように、願い求めなさい。懸命に努

めなさい。その人があなたを退けはしないかと恐れなさい。受け取るように命じられているのはその人ではなく、差し出すように命じられているのはあなただからです。32:6 しかも、主は「与えよ」とも、「差し出せ」とも、「善を施せ」とも、「助けよ」とも言われませんでした。そうではなく、「友だちをつくれ」と言われたのです。友だちは、一度与えることによってではなく、十分に休ませることと、長い交わりによってできるものです。信仰も、愛も、忍耐も、一日のものではないからです。そうではなく、『最後まで耐え忍ぶ者は救われる』のです（マタイ一〇・二二）。

33〜38章　分け隔てなく施すことと、愛の道

33:1 それでは、どのようにして、その人がこれらのものを与えるのでしょうか。それは、その人への誉れと好意と親しさのゆえに、主が与えてくださるからです。『わたしは、友だちにだけでなく、友だちの友だちにも与えるからである』[1]。33:2 では、神の友であるこの人とは、だれのことでしょうか。あなたは、だれがふさわしく、だれがふさわしくないかを、さばいてはなりません。判断を誤ることがありうるからです。知らないために見分けのつかないときは、こうするほうがよいのです。ふさわしい人々のために、ふさわしくない人々にもよくすることです。善さの劣る人々を用心して、すぐれた人々にさえ出会いそこなうよりは、そのほうがよいのです。33:3 惜しんで、ふさわしい人かどうかを見分けるふりをすれば、神に愛される人々のだれかを、おろそかにしかねないからです。そのことへの罰は、永遠の火の懲らしめです。しかし、困っている人すべてに分け隔てなく差し出すなら、神のもとで人を救う力のある人々のだれかにも、必ず行き当たります。33:4 ですから、『人をさばくな。自分がさばかれないためである。あなたの量るそのはかりで、自分にも量りかえされるであろう。おし入れ、ゆすり入れ、あふれ出るまでに量をよくして、あなたに返されるであろう』（マタイ七・一〜二、ルカ六・三八）。33:5 神の弟子として名を記された人々すべてに、あわれみの心を開きなさい。からだを見て、見下してはなりません。年齢を見て、なおざりにしてはなりません。また、だれかが、持ち物がない、身なりが悪い、見た目が醜い、あるいは弱いと見えるとします。そのことで魂のうちに嫌気を起こし、顔をそむけてはなりません。33:6 それは、わたしたちがこの世にやって来るために、外からまとわされた姿です。わたしたちが、だれにも共通のこの学びの場にはいることができるためです。しかし、内には、父と、その子が、隠れて住んでおられます。この子は、わたしたちのために死なれ、わたしたちと共によみがえられたかたです。

34:1 この見える姿は、死と悪魔を欺きます。内にある富と美しさは、彼らには見えないからです。彼らは、この肉のことで荒れ狂います。肉を弱いものとして見下し、内にある資産には目が見えないままです。わたしたちがどれほどの『宝』を『土の器』に入れて携えているかを、知らないのです（第二コリント四・七）。その宝は、父なる神の力と、神の子の血と、聖霊の露とによって、まわりを城壁で囲まれています。34:2 しかし、あなたは欺かれてはなりません。真理を味わい、大いなるあがないにふさわしいとされたあなたです。そうではなく、ほかの人々とは反対に、自分のために軍勢を集めなさい。武器を持たず、戦わず、血を流さず、怒らず、汚れのない軍勢です。神を敬う老人たち、神に愛されるみなしごたち、柔和を武具としたやもめたち、愛で身を飾った男たちです。34:3 あなたの富で、このような人々を手に入れなさい。からだと魂を守る護衛としてです。彼らを率いておられるのは神です。この人々のゆえに、沈みかけた船も、聖徒たちの祈りだけで舵を取られて、軽くなります。盛んな病も、手を置くことで追い払われて、鎮められます。強盗の襲撃も、敬虔な祈りによって分捕られて、武器を失います。悪霊どもの力も、力強い命令によって責められて、打ち砕かれます。

35:1 これらの兵士はみな働き者で、確かな見張りです。だれひとり怠ける者はなく、だれひとり役に立たない者はいません。ある者は、神に願って、あなたの赦しを得ることができます。ある者は、弱っているあなたを慰めることができます。ある者は、すべてのものの主に向かって、あなたのために共に苦しんで泣き、うめくことができます。ある者は、救いに役立つことを教え、ある者は、率直に戒め、ある者は、好意をもって助言することができます。そして、みなが、真実に、欺きなく、恐れなく、偽りなく、へつらわず、飾らずに愛することができます。35:2 ああ、愛する人々の快い世話よ。ああ、大胆な人々の幸いな奉仕よ。ああ、神だけを恐れる人々の混じりけのない信仰よ。ああ、偽ることのでき

ない人々の言葉の真実よ。ああ、自分は神に仕え、神に願いを聞いていただき、神に喜ばれているのだと信じる人々の、わざの美しさよ。彼らは、あなたの肉に触れているのではなく、めいめいが自分の魂に触れているのだと思っています。兄弟に語っているのではなく、あなたのうちに住んでおられる世々の王に語っているのだと思っています。

36:1 ですから、信者はみな美しく、神にふさわしく、その呼び名にふさわしい人々です。その名を、王冠のように身に帯びているのです。とはいえ、選ばれた人々の中でも、さらに選ばれた人々が、すでにいます。目立たない人ほど、いっそうそうなのです。彼らは、いわば船を陸に引き上げるように、世の大波から自分を引き上げて、安全な所へ連れ戻します。聖なる者と見られることを望まず、だれかがそう言えば恥じ入ります。言い表しようのない奥義を、心の深みに隠しています。そして、自分の高貴さが世で見られることを、潔しとしません。ロゴスは、この人々を『世の光』、『地の塩』と呼んでおられます（マタイ五・一四、一三）。36:2 これこそが種です。神のかたちと似姿であり、神のまことの子、また相続人です。父の大いなる、釣り合いのとれた計らいによって、いわば異国に旅するように、この地へ遣わされているのです。36:3 この種のために、世の見えるものも見えないものも造られました。あるものはその種に仕えるため、あるものはその鍛錬のため、あるものはその学びのためです。そして、この種がこの地にとどまっている間は、すべてのものが保たれています。その種が集められれば、すべてのものはただちに解かれるでしょう。

37:1 実際、これ以上何が要るでしょうか。愛の奥義を見なさい。そのとき、あなたは父のふところを仰ぎ見ることになります。ひとり子なる神だけが、それを解き明かされたのです（ヨハネ一・一八）。神ご自身もまた愛です（第一ヨハネ四・八、一六）。そして、愛のゆえに、わたしたちに見られるものとなられました。37:2 そして、神の言い表しようのないところは父であり、わたしたちを思いやるところは母となりました。父は愛してくださって、女となられたのです。その大きなしるしは、父がご自身からお生みになったかたです。37:3 そして、愛から生まれた実は愛です。だからこそ、このかたも自ら下って来られました。だからこそ、人間を身にまとわれました。だからこそ、人間の苦しみを進んで受けられました。わたしたちの弱さに合わせてご自分を量り、愛してくださったわたしたちを、ご自分の力に合わせて量りかえすためです。37:4 そして、主は、注ぎの供え物となろうとされ、ご自分をあがないの代価として差し出しつつ、わたしたちに新しい契約を残されます。『わたしの愛をあなたがたに与える』（ヨハネ一四・二七、一三・三四）。この愛とは何でしょうか。どれほどのものでしょうか。主は、わたしたちひとりひとりのために、すべてのものに値する命を捨てられました。37:5 主は、その返しとして、この命を互いのために差し出すよう、わたしたちに求めておられます。わたしたちは兄弟たちに命を負っており、救い主とこのような取り決めを結びました。それなら、世のものを、なおも蓄えて閉じ込めておくでしょうか。貧しく、自分のものではなく、流れ去るものをです。もうすぐ火のものになるものを、互いに締め出しておくでしょうか。37:6 ヨハネは、まことに神々しく、霊感に満ちて言います。『兄弟を愛さない者は、人殺しである』（第一ヨハネ三・一五）。その人はカインの種、悪魔の養い子です。神のあわれみの心を持たず、よりよいものへの望みを持ちません。種を持たず、実を結びません。いつも生きている天上のぶどうの木の枝ではなく、切り取られ、いっせいに燃える火を待っています。

38:1 しかし、あなたは、パウロが救いのために示している『最もすぐれた道』を学びなさい（第一コリント一二・三一）。『愛は自分の利益を求めない』（第一コリント一三・五）。そうではなく、兄弟に注ぎ出されます。兄弟に心を奪われ、兄弟のために、思慮深く我を忘れます。『愛は多くの罪をおおう。38:2 完全な愛は恐れをとり除く。愛は高ぶらない、誇らない。不義を喜ばないで、真理を共に喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える。愛はいつまでも絶えることがない。預言はすたれ、異言はやみ、いやしは地上に残される[2]。いつまでも存続するものは、この三つ、信仰と望みと愛である。このうちで最も大いなるものは、愛である』（第一ペテロ四・八、第一ヨハネ四・一八、第一コリント一三・四、六～八、一三）。それも当然です。38:3 信仰は、わたしたちが神を見て、自分の目で確かめるときには、去っていくからです。望みも、望んでいたものが与えられれば、消えうせるからです。しかし、愛は満ちみちたところへと共に進み、完全なものが授けられると、いっそう増し加わるから

です。38:4 人がこの愛を魂に宿すなら、つまずいたところを戦って取り返すことができます。たとえ罪の中に生まれていても、禁じられたことを数多く行ってきても、愛を増し加え、清い悔い改めを得て、そうできるのです。38:5 実際、たとえ富む人とはだれのことかを学んだとしても、次のことが、あなたの絶望と自暴自棄のもとになってはなりません。

訳注

1 福音書には見えない主の言葉。
2 聖書のこの箇所では『知識はすたれる』とある。

39〜41章　悔い改めと、導き手となる神の人

39:1 その富む人とは、天に場所を持たない人のことです。また、持っているものをどう使えば、富の悪名と、いのちに入る難しさとを逃れられるかも、学んだとします。どうすれば永遠の善いものにあずかれるかも、学んだとします。ところが、その人が、証印とあがないを受けた後に、何かの罪やあやまちに巻き込まれたとします。無知や弱さ、あるいは心ならずも陥った境遇のためです。それで、すっかり押し流されてしまったとします。次のこととは、この人は神にまったく罪に定められた、ということです。39:2 真実をもって、心をつくして神に立ち返る人には、だれにでも扉が開いているからです。そして、父は、まことに悔い改める子を、心から喜んで迎えてくださるからです。まことの悔い改めとは、もはや同じ罪を負わないことです。そうではなく、そのために自分で自分に死を宣告した罪を、魂から根こそぎ抜き取ることです。そうした罪が取り除かれると、神は再びあなたのうちに住んでくださるからです。39:3 主は、こう言っておられるからです。罪人がひとりでも立ち返って悔い改めるなら、天では、父と御使いたちに、このうえなく大きな喜びと祝いがある（ルカ一五・七、一〇）。だからこそ、主はこう叫んでおられます。39:4『わたしが好むのは、あわれみであって、いけにえではない。わたしが望むのは、罪人の死ではなく、その悔い改めである。たとい、あなたがたの罪が緋の羊の毛のようであっても、雪のように白くしよう。闇よりも黒くても、洗って、白い羊の毛のようにしよう』（ホセア六・六、マタイ九・一三、エゼキエル一八・二三、イザヤ一・一八）。39:5 罪の赦しを与え、あやまちを数えないでいることは、神おひとりにしかできないからです。主は、わたしたちにさえ、悔い改める兄弟たちを日ごとに赦すように命じておられるほどです。39:6 わたしたちは悪い者でありながら、良い贈り物をすることを知っています（マタイ七・一一）。それなら、『あわれみ深き父』は、なおさらではありませんか。『慰めに満ちたる』よき父、あわれみの心に富み、あわれみの豊かなかたは、本来、寛容なかたです（第二コリント一・三）。立ち返る人々を待っておられます。そして、立ち返るとは、まことに、罪をやめて、もはやうしろを見ないことです。

40:1 さて、すでに犯した罪には、神が赦しを与えてくださいます。しかし、これからの罪には、めいめいが自分で自分に赦しを与えるのです。そして、悔い改めるとは、過ぎ去ったことを自ら責め、それを忘れてくださるよう父に願うことです。父は、すべてのもののうちでただひとり、行われたことを行われなかったことにおできになるかたです。ご自分のもとからのあわれみと霊の露とによって、先に犯した罪をぬぐい去ってくださるのです。40:2『わたしは、あなたがたを見いだすそのありさまで、あなたがたをさばくからである』[1]と言っておられます。40:3 そして、事あるごとに、すべてのことの終わりが、このことを叫び知らせています。ですから、生涯にわたって最も大きなことを良く行ってきても、終わりになって悪へと乗り上げてしまう人がいます。劇の幕切れで競技から外れたその人には、前の労苦はみな益のないものとなります。一方、以前は悪く、だらしなく生きてきた人もいます。その人も、後になって悔い改めれば、悔い改めの後の時によって、長い間の悪い生き方に打ち勝つことができます。40:4 ただし、それには、よほどの細心さが要ります。長い病に苦しんだからだには、養生と、より多くの気配りが必要なのと同じです。40:5 盗む人よ、赦しを得たいと望みますか。もう盗んではなりません。姦淫した人は、もう情欲に燃えてはなりません。不品行をした人は、これからは清く生きなさい。奪い取った人は、返しなさい。さらに上乗せして返しなさい。偽りの証人は、真実を身につけなさい。偽って誓った人は、もう誓ってはなりません。ほかの情念も、切り詰めなさい。怒り、欲望、悲しみ、恐れです。世を去るときに、ここで前もって、訴える者と和解していたと見いだされるためです。40:6 たしかに、共に育ってきた情念を一度に切り取ることは、おそらくできないでしょう。しかし、神の力、人の切なる

願い、兄弟たちの助け、純真な悔い改め、絶え間ない修練によって、それは成し遂げられます。

4:1 ですから、尊大で、力があり、富んでいるあなたは、ぜひとも神の人をだれかひとり、自分の上に立てなければなりません。競技者の鍛え手として、また舵取りとしてです。せめてひとりは敬いなさい。せめてひとりは恐れなさい。率直に語り、厳しく引き締めると同時にいやしてもくれる人の言うことを、せめてひとりからは聞くように努めなさい。4:2 目にとっても、いつまでも甘やかされたままでいるのは、益にならないからです。そうではなく、もっと健やかになるために、時には涙を流し、しみて痛むことも益になるからです。4:3 同じように、魂にとっても、絶え間ない快楽ほど破滅をもたらすものはありません。率直な言葉に動かされないままでいるなら、魂はやつれ衰えて、盲目になってしまうからです。4:4 この人が怒ったら、恐れなさい。嘆いたら、悲しみなさい。怒りをやめたら、敬いなさい。罰を退けようと願うときは、それに先んじなさい。4:5 この人に、あなたのために幾夜も目を覚ましていてもらいなさい。あなたのために神にとりなし、いつもの祈願によって、まじないをかけるように父の心を動かしてもらうのです。子らが願うとき、父のあわれみの心は持ちこたえられないからです。4:6 あなたがこの人を神の御使いのように重んじ、少しも悲しませないなら、この人は清く願ってくれるでしょう。悲しむとしても、あなたによってではなく、あなたのために悲しむのです。これが偽りのない悔い改めです。『神は侮られるようなかたではない』（ガラテヤ六・七）。空しい言葉に心を留められることもありません。4:7 神だけが、心の骨髄と腎とをお調べになるからです。神は、火の中にいる者たちの声を聞き、大魚の腹の中で願い求める者たちの声を聞き入れてくださるからです。また、信じる人々すべての近くにおられ、神を認めない人々からは、彼らが悔い改めないかぎり、遠くにおられるからです。

訳注

1 聖書には見えない主の言葉。

42章　使徒ヨハネと盗賊になった若者

42:1 では、このようにまことに悔い改めたなら、あなたには、頼むに足る救いの望みが残っています。そのことに勇気を持てるように、話を聞きなさい。作り話のようで作り話ではなく、本当の話です。使徒ヨハネについて言い伝えられ、記憶のうちに守られてきた話です。42:2 こういう話です。暴君が死んで、ヨハネがパトモス島からエペソに移ったときのことです。ヨハネは招かれて、近くの異邦人の地方にも出かけて行きました。ある所では監督たちを立て、ある所では教会全体を整えるためでした。またある所では、御霊が示す人々のうちから、せめてひとりでも聖職に任じるためでした。42:3 そうして、ヨハネは、遠くない町の一つにも来ました。その町の名を言う人もいます。ヨハネは、ほかのことでも兄弟たちの心を休ませました。そして最後に、そこに立てられていた監督に目を向けました。体がしっかりしていて、顔立ちが美しく、魂の熱い若者を見て、こう言いました。「この若者を、心をつくしてあなたに預ける。教会とキリストとが証人だ」監督はそれを引き受け、何もかも約束しました。それでもヨハネは、同じことをもう一度強く言い、厳かに念を押しました。42:4 それから、ヨハネはエペソへ去って行きました。長老は、預けられた若者を家に引き取りました。養い、手もとに置き、いたわり、最後には洗礼を授けて照らしました。その後は、それまでのような細かな世話と見張りをゆるめました。主の証印という完全な守りを、若者に付けてやったと考えてのことでした。42:5 ところが、若者は、時が来る前に気ままを手にしました。そこへ、同じ年ごろの者たちが寄って来て、若者を堕落させました。怠け者で、身を持ちくずした、悪事に慣れた者たちです。彼らは、はじめはぜいたくなもてなしで若者を誘い込みました。それから、いつしか夜に追いはぎに出かけるときにも、若者を連れて行くようになりました。そしてついには、もっと大きな悪事も一緒にやれと求めるようになりました。42:6 若者は少しずつそれに慣れていきました。生まれつきの気性が大きかったので、くつわを受けつけない力の強い馬のように、まっすぐな道からそれました。そして、はみをかみしめて、ますます激しく、深い淵へと突き進んで行きました。42:7 若者は、神にある救いにすっかり絶望しました。もう、小さなことは何も考えませんでした。そうではなく、どうせ一度滅びた身なのだから、何か大きなことをしでかして、ほかの者たちと同じ目にあおうと考えました。そこで、まさにこの仲間たちを引き連れて盗賊の一団をつくり、たちまち首領になりました。だれよりも乱暴で、だれよりも血に飢え、だれよりも残忍な首領でした。42:8 時がたちました。ある必要が起こって、人々はヨハネを呼び戻しました。ヨハネは、そのために来たほかの用件を整え終えると、言いました。「さあ、監督よ、預けたものをわたしたちに返しなさい。あなたが治める教会を証人として、わたしとキリストとが、あなたに預けたものだ」42:9 監督は、はじめは驚きました。受け取ってもいない金のことで、言いがかりをつけられていると思ったのです。持ってもいないもののことで、その言葉を本当だと思うこともできず、かといってヨハネを疑うこともできませんでした。ところが、ヨハネが「わたしが返してもらいたいのは、あの若者だ。兄弟の魂だ」と言うと、老人は深くうめき、涙さえ流して言いました。「あの者は死にました」「どうして、どんな死に方をしたのか」「神に対して死んだのです。悪い、救いようのない者になって、つまるところ盗賊になってしまったからです。今では教会の代わりに山を占めて、似た者どもの一隊を連れています」42:10 使徒は着物を引き裂き、大声で泣き叫んで頭を打ちました。そして言いました。「兄弟の魂に、なんとよい番人を残しておいたことか。だが、すぐに馬を引いて来てくれ。だれか道案内をしてくれ」ヨハネは、そのままの姿で、教会からその足で馬を駆って行きました。42:11 その場所に着くと、ヨハネは盗賊たちの見張りに捕らえられました。逃げもせず、命乞いもしませんでした。そうではなく、こう叫びました。42:12 「このために来たのだ。おまえたちの頭のところへ連れて行け」頭は、それまで武具を着けたまま待ち構えていました。しかし、近づいて来るのがヨハネだとわかると、恥じて逃げ出しまし

た。ヨハネは、自分の年も忘れて、力のかぎり追いかけ、叫びました。42:13「子よ、なぜわたしから逃げるのか。おまえの父ではないか。丸腰の年寄りではないか。子よ、わたしをあわれんでくれ。恐れることはない。おまえには、まだいのちの望みがある。わたしが、おまえのためにキリストに申し開きをしよう。必要なら、おまえの死を喜んで引き受けよう。主がわたしたちのための死を引き受けられたように。おまえのために、わたしの命を代わりに差し出そう。止まれ。信じるのだ。キリストがわたしを遣わされたのだ」42:14若者はそれを聞くと、まず立ち止まり、下を向きました。それから武器を投げ捨て、震えながら激しく泣きました。そして、近づいて来た老人を抱きしめました。泣き声で、できるかぎりの申し開きをし、涙で二度目の洗礼を受けたのです。ただ、右手だけは隠していました。42:15ヨハネは、救い主のもとで若者のための赦しが得られたと保証し、誓いました。若者に願い、ひざまずき、悔い改めによって清められたものとして、その右手にまで口づけしました。そして、若者を教会に連れ戻しました。ヨハネは、たっぷりと祈って若者のために願い求め、絶え間ない断食で共に戦いました。また、さまざまな言葉の魅力で、まじないをかけるように若者の心を和らげました。人々の言うところでは、若者を教会の中にしっかりと立たせるまで、ヨハネはそこを去らなかったそうです。こうしてヨハネは、まことの悔い改めの大きな手本と、生まれ変わりの大きなしるしとを示しました。目に見える復活の、勝利の記念です。42:16晴れやかに喜び、賛美し、天を開いて[1]。だれよりも先に、救い主ご自身が出迎えてくださり、右手を取って迎え入れてくださいます。影のない、絶えることのない光を差し出してくださり、父のふところへ、永遠のいのちへ、天国へと導いてくださいます。42:17だれでも、これらのことを信じなさい。神の弟子たちと、保証してくださる神とを信頼して、信じなさい。預言と、福音書と、使徒たちの言葉を信頼して、信じなさい。これらと共に生き、これらに耳を傾け、その行いに励む人がいます。その人は、まさに世を去るときに、教えの行き着く所と、そのあかしとを見るでしょう。42:18ここで悔い改めの御使いを受け入れる人は、からだを離れるそのときになって、悔い改めることはないからです。救い主がご自分の栄光と軍勢とを伴って来られるのを見ても、恥を受けず、火を恐れもしないからです。しかし、もしだれかが、快楽のたびごとに罪を重ねながら、そのままとどまることを選ぶとします。ここでのぜいたくを永遠のいのちよりも重んじ、救い主が赦しを与えてくださるのに、背を向けるとします。その人は、もう神も富も、つまずいたことも、責めてはなりません。そうではなく、自ら進んで滅びようとしている、自分の魂を責めなさい。42:19しかし、救いに目を注ぎ、それを慕い、しきりに、力ずくで願い求める人もいます。その人には、天におられるよき父が、まことの清めと、変わることのないいのちとを与えてくださいます。42:20この父に、栄光と誉れと力と、永遠の威光とがありますように。生きている者と死んだ者との主、しもべイエス・キリストによって、また聖霊によって、今も、代々にわたって、世々限りなく。アーメン。

訳注

1 写本が破れて十数行が失われたため、文の途中から始まる。

救われる富者とは誰か

2026年11月23日版
著者　アレクサンドリアのクレメンス
制作　藤遥
発行　christian-classics-jp
公開　https://christian-classics-jp.github.io/site/who-is-the-rich-man/
原稿　https://github.com/christian-classics-jp/site/tree/master/books/who-is-the-rich-man
全文を、ギリシア語原文（Τις ὁ σωζομενος πλουσιος）からAIを使って翻訳しました。
訳文はCC BY-SA 4.0で公開しています。引用した聖書の本文は含みません。